

## コープおおいたの福島訪問

### ●コープおおいたとコープふくしまの相互交流

コープおおいたは、2011年3月25日からコープふくしまへの物資や現地支援に取り組んで以来、商品の買い支えや、生産者や組合員の交流会の実施、風評被害を防ぐために正しい情報を伝える機会を設置するなど、息の長い支援活動を展開しています。11年11月には復興の願いを込めて、また末永く支援する決意の象徴として福島県相馬市と新地町の小中学校19校に大分県の県木、豊後梅を贈呈し、植樹しました。

そして、13年3月25日～27日には、コープおおいたの職員、組合員理事、日田市民生協役員、取引業者の計10人が、コープふくしまとの絆をより深め、現状を知るために、豊後梅を贈呈した小学校や被災地を訪問しました。

最初に、福島市の生鮮食料品の流通拠点である福島中央卸売市場を訪問しました。

コープおおいたでは「がんばっぺ ふくしま」という福島県産野菜の応援ボックスの企画や、復興支援朝市、生産者交流会などを通じた支援を行っています。また、コープふくしま店舗でも福島と大分の市場関係者を通じて、大分県の農産品を供給する「大分フェア」を震災以降23回開催してきました。

これらの支援と相互交流に協力している福島中央卸売市場、そして生産者との交流会が開かれました。



組合員からの応援メッセージを集めたポスター。

### ●安全で安心できる物を提供するために

東京電力福島第一原子力発電所の事故以来、福島県産というだけで農産物が売れなくなる風評被害が続いています。福島中央卸売市場でも放射性物質検査機械を導入し、厳しい基準での検査や、出荷前の自主検査、場内の除染などを実施し、安全性を保つための努力をしていますが、なかなか風評被害の払拭ができません。

交流会ではそういった現状を教えていただき、さらに、福島市内で桃の生産をする生産者高橋勘重さんから、経営する3haの果樹園で行なった除染作業についてのお話を伺いました。

高橋さんの果樹園は決して放射線量の高い地域ではありませんが、除染作業によってより確かな安全性を確保するために500本の桃の木の樹皮を手作業で1本1本、洗浄していったそうです。極力、放射性物質であるセシウムが飛ばないように管理しながら作業するため、洗浄できるのは1日10数本。雨の日はセシウムが混じった雨水が飛び散るため作業ができず、また乾燥している日も土ぼこりが上がってしまうため作業ができません。そのため、すべてを洗浄し終わるまでに数カ月かかったといえます。

「安全・安心な桃を提供するために当然のことだと思ってやっています。放射能と向き合っていないといけませんから、しっかり勉強し、しっかり怖がることで、自信を持って安全で安心できる物を提供することにつながると思っています」



青果市場での交流会の様子。

高橋さんのその言葉に、福島県の人たちが安全・安心を確保するためにどれほどの努力を重ねているかをあらためて知らされました。

最後にコープおおいたの「がんばっぺ ふくしま」を利用する組合員からの応援メッセージを集めたポスターが6枚贈呈されました。そして今後も相互交流によって絆を深めながら支援を続けていくことを約束しました。

### ●被災地の小学校を訪ねて

2日目は新地町にある新地小学校の訪問です。浜通り地区の最北に位置する新地町は津波で大きな被害を受けました。コープおおいたでは11年8月25日に、福島と大分を結ぶ東日本大震災復興支援として組合員より寄せられた扇風機160台と、11月15日に豊後梅の苗木、花の種（パンジー、ビオラ、なでしこ）を相馬市と新地町の小中学校に贈呈しましたが、そのうちの1校が新地小学校です。

まずは、児童の代表3人に、準備してきた大分特産の八朔とノートを贈呈しました。その後、渡邊博之校長先生から、現在の状況と課題を伺いました。

新地町では津波の被害で116人が犠牲となり、新地小学校の児童2人、保護者3人、家族13人も含まれています。また、原発事故の影響を心配して、14人の児童が他県に移転しています。

家をなくした人も多く、震災後、3月14日から6月12日までは体育館と北校舎の各教室が避難所として使われていました。最大時342人が避難されていたとのことですが、名簿に名前が記入されていない方を含めると400人以上はいたといえます。

震災直後の非常事態が続く中、1日でも早く日常を取り戻そうと、学校を一部再開したのは4月12日のことでした。

新地小学校は東京電力福島第一原発から約55km北に位置し、原発事故の影響が今も続いています。事故直後は0.4マイクロシーベルト/h程度の放射線量があったため、屋外活動が制限され、学校を再開

しても校庭が汚染されているため、震災直後の5月の運動会は中止になってしまいました。学校としてはなんとか日常の活動ができるようにと校庭の土を除染し、0.1マイクロシーベルト/hまで下げることができましたが、汚染された土の置き場がないため、校庭の隅に埋められているそうです。

また、外遊びはできるようになったものの、一部の子どもたちはそれ以外はどこにも行けない状態が続いています。津波を間近で見てしまったため海は怖くて近付かず、山は汚染されているため行くことができず、毎年春に行っていた遠足は中止になってしまいました。植物の栽培活動もできませんし、低学年の生活科の「春をさがそう」「秋をさがそう」という野外授業がまったく成り立たなくなってしまうそうです。

コープおおいたでは、その話を11年の植樹の際に聞き、組合員が中心となって、12年の秋に松ぼっくりやドングリを集めて送りました。子どもたちは「こんなに大きな松ぼっくりは見たことがない」と大喜びでクリスマスリースづくりなどで授業でも使ってくれたという報告も受けました。



八朔（上）とノート（下）を受け取る児童。

## ●植樹した豊後梅の成長に、福島との絆を再確認

学校では、心のケアにも力を入れています。カウンセラーやスクールカウンセラーを招き、子どもだけではなく保護者も含めた心のケアを行なっているそうです。震災直後は辛い気持ちをはき出せずにいたことがストレスとなり、時間の経過とともに問題行動として現れ始めたり、誰にも言えずに心の中に抱えていたりしていることを、カウンセラーにだけ打ち明けることもあります。日々の生活の中でも、何かのきっかけで傷付いていることを周囲が気づかうことも多いそうです。

そういった話の1つひとつに丁寧に耳を傾けながら、震災前の生活に戻れるように見守ることも学校の大切な役目になっています。

交流後は、校庭に出て11年11月15日に植樹した豊後梅の成長を確認しました。植樹のときに比べ、確実に幹が太くなり、今にも咲きそうな梅のつぼみをつけていたことに、歓声が上がっていました。これからも大分と福島を結ぶ梅として大切に見守り、息の長い支援を続けていこうと決意を新たにし、新地小学校を後にしました。

午後は、コープふくしまの組合員理事・小澤和枝さんと渡邊洋子さんの案内を受け、新地町から相馬市、南相馬市小高区、飯館村などを訪問しました。

壊れたままの堤防や津波で土台だけになってしまった家の跡など、復興がまったく進んでない様子に皆、胸を痛めていました。特に、福島第一原発から15kmにある小高地区は、12年4月に警戒区域が解除されてはいるものの、震災直後のままの風景が広がっていることに、驚きを隠せませんでした。

コープおおいの組合員理事の松尾孝子さんは、訪問の感想を「被災地の復興が進んでいないことには本当に驚きました。これは大分に帰って皆に伝えなければならないですし、次の支援に生かしていかなければならないと強く思いました」と話してくれました。

## ●求められる多様なニーズへの支援

最終日は、福島市の北幹線（きたかんせん）仮設住宅で、大分の団子汁と鶏飯の炊き出し支援を行いました。ここには双葉町から避難してきている方々49世帯、90人が暮らしています。入居している方は60代から80代と高齢者が多く、最高齢は92歳です。三世代で暮らしていた家族が、別の地域に子どもや孫たちが避難していることで、仮設住宅では一人暮らしになっている方も多いのだそうです。

コープおおいが、福島県の仮設住宅を訪問するのは二度目。一度目は、豊後梅の植樹の際に訪れた、新地町の緒川公園内仮設住宅で、このときはストーブや血圧計を提供しました。その際に、高齢者が引きこもりがちだという話を聞き、おいしいものを作って食べてもらうことをきっかけに外に出てきてもらえればという思いで、今回の炊き出し支援が企画されました。大分名物の団子汁をコープおおいの男性職員が、鶏飯をコープふくしまが、それぞれ担当した合作メニューです。さらに、コープおおいからは八朔、日田市民生協からは入浴剤のヒノキチップが贈呈されました。

「一人暮らしの方が多くいつも同じような物を食べているので栄養が偏りがちです。こういう栄養たっぷりの料理を支援してもらえるのは感謝の言葉しかありません。支援に頼りすぎずに、1日も早く、皆が自立した生活ができるようにしたいと思っています」

仮設住宅の自治会長、堀井五郎さんはそう話します。



炊き出して作った大分の郷土料理である団子汁をみんなへ配る。

震災から2年が経過し、被災した人1人ひとりが抱える課題が多様になっています。仮設住宅での生活が、長くなれば長くなるほど、問題が複雑になり、よりきめの細かい支援が求められていることを実感しました。

### ●支援のヒントをもらった3日間

3日間の日程はあっという間に過ぎましたが、内容の詰まった充実した訪問になりました。今回、初めて福島を訪れたコープおおいた組合員理事の後藤孝代さんは「被災地で何が求められているのか、何ができるのかを、これまでもいろいろな方に伺い、支援をしてきました。でも、実際に福島に来て、被災した地域を見て、話をしないと分からないことがたくさんあるのだと、今回訪問してあらためて思いました。でも来たことで『え？こんな小さなことが足りないの？』という発見もたくさんあり、支援のヒントをいただいたので、地元に戻って皆で共有していきたいと思います。これからもコープふくしまを通じて、福島との絆を深め、小さな支援をコツコツと積み上げ、大分と福島をつないでいきたいですね」と話してくれました。

コープおおいたが最初に福島に支援に来たのは11年3月25日。2年にわたる支援によって、思いを込めて植樹した豊後梅の幹が一段と太くなったように、コープおおいたと、コープふくしまの絆も一層、太くなったようです。

コープおおいたの参加者は、これからも福島の皆さんの思いに寄り添いながら、支援を続けていくことを胸に誓い、帰路につきました。